

DIE WIENER PHANTASTEN

Hausner, Hutter, Brauer, Lehmden, Fuchs



ルドルフ・ハウスナー《愛の樹》1979年 アクリル、油性塗料

ウィーン幻想派展 1992年10月16日[金]→11月15日[日]

高松市美術館

香川県高松市紺屋町10-4
tel.0878(23)1711

主催—高松市美術館・読売新聞社大阪本社・美術館連絡協議会・西日本放送
後援—外務省・文化庁・オーストリア大使館

協賛—花王

月曜休館 午前9時→午後5時(入館は4時30分まで)
夜間開館—毎週金曜午後7時まで(入館は6時30分まで)
入場料—一般800円 高大生500円 小中生300円
(前売り及び団体20名様以上は2割引)

ウィーン幻想派登場

クリムト、シーレその他、各界に鬼才、天才の輩出した世紀末のウィーンはさながら文化の一大ルネッサンスを迎えたかの感があるが、第一次大戦を境に栄光のハプスブルク王朝はその長い歴史に幕をおろし、クリムト、シーレは世を去り、ココシュカ、フロイト、ヴェイトゲンシュタインはウィーンを捨て、ウィーンは再び典雅ではあるが静かなヨーロッパの一地方都市に過ぎなくなる。こうした状況は第二次大戦の頃まで変わらないが、それまでの沈滞を破るかのように戦後の瓦礫の中から忽然と現れ、一世を風靡したのがウィーン幻想派であった。先輩格のハウスナーを除けば、残るフックス、ブラウアー、フッター、レームデンの4人は当時やと20歳を過ぎたばかりという若さであった。抽象芸術が時代のキーワードとして脚光を浴びていた当時、これらの若い画家たちは細密画的な技法と鮮烈な色彩、そしてなにより刺激的、幻想的なイメージを駆使して戦後の具象芸術に新しい地平を切り開いた。彼らはフロイトの精神分析やシュールレアリスム、あるいは過去の巨匠たちの作品に多くを学んだが、自らの幼児体験、戦争体験その他様々な体験を直接、間接に作品に生かし、それぞれが独自の世界を形成した。しかし彼らの芸術は奔放かつ繊細な想像力に裏打ちされた幻想性という点では共通するものがあり、ウィーン幻想派と呼ばれるゆえんであるが、その芸術はヨーロッパにおける東西の接点ともいべきウィーン特有の精神風土の産物であったともいえよう。今日、ウィーン幻想派はいわばポスト(あるいはネオ)・シュールレアリスムとして20世紀美術の中に古典的な地位をしめているが、その芸術は時に古典調、時にポップ調、時にサイケ調、時に劇画調、また時に素朴派風であり、いわゆる“芸術”の枠にとらわれない柔軟性を見せ、現代のSFムービーやコミックスなど、大衆文化に与えた影響も少なくない。

ウィーン幻想派の日本での初の総合的な展覧会は今から20年前の1972年に開かれたが、今回はそれをさらにスケールアップしたもので、計100点をこえる出品作は我々を日頃体験できない異次元の夢と幻想の世界にいざなうことだろう。

成城大学教授
千足 伸行



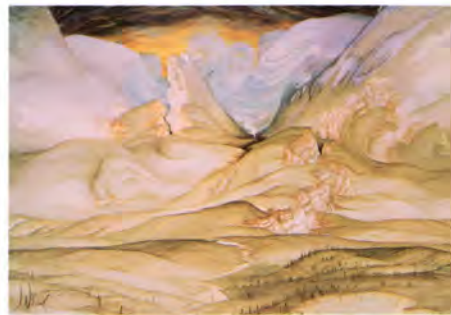
ルドルフ・ハウスナー〈原罪の後のアダム〉1957年 テンペラ、油性塗料



エルnst・フックス〈イカルス〉1978年 水彩、ホワイ

ウィーン幻想派展

DIE WIENER PHANTASTEN
Hausner, Hutter, Brauer, Lehmden, Fuchs



アントン・レームデン〈ひび割れる風景〉1977-82年 油彩



ヴォルフガング・フッター〈大きな好奇心〉1978年 油彩



アrik・ブラウアー〈最後の鶏の鳴き声〉1976年 油彩、アクリル

《講演会》

「夢と現実のはざままで—— ウィーン幻想派の芸術」

11月1日(日) 午後2時から
講師：千足 伸行(成城大学教授)
美術館1階講堂にて 入場無料 先着200名様

《次回展覧会のご案内》

ベル・エポックのパリ展

11月20日(金)→12月23日(水)